

ソ連に送られた。朝夕は寒い、沿海州の朝は霜が降りていた。空腹と野宿の寒さは忘れる事が出来ない。幸い抑留生活を終わり昭和二十三年十月一日、帰還船英彦丸で舞鶴に復員した。神の守りか佛の守りか無事で帰って来たのだが実家に帰ってみるとこの間渡満したばかりの妻は白木の箱となつて先に帰つて待つていた。

こんな馬鹿なことがあるものかと思つたがこれは事実であつた。胸に刃を突き刺されたようだった。体の力が抜けてなくなつてゆくようであつた。自分は落ちて着いて思つた。自分は生きなくてはならないそれには働かなくてはならない。唯夢中で働いて耐え難きを耐え忍んでの生活である。ああよく耐えたと思つた。健康な体に恵まれたお蔭でと感謝している。

現在は妻と長男夫婦と男の子の孫一人と長女と皆元気で働いている。これもみな現在の平和のお蔭であると感謝している。

赤い夕陽の太陽は暗かった

福島県 鈴木久次

私は小学校五年生頃から、満州大陸にあこがれを持つていた。新聞や写真で見る広大な大地、赤い夕陽、牧歌的田園風景などに幼い胸をときめかしていた。いつかは満州に渡り、就職し、大きく飛躍しようとの夢を持ちつづけていた。

昭和十四年九月、満州国職員試験をうけ合格。十月九日、吉林丸で大連に到着した。夢にまでみた満州大陸に降り、「やつと俺の夢が実現した」と、大きな希望と期待に胸をふくらませ、旅順港や二〇三高地の日露戦争の戦跡をまわり、「満州国の開発伸展に最大の努力を尽くそう」と決意をした。新京に行き、一週間研修を受け、奉天省開原県公署に配属された。満鉄沿線の人口三千人ぐらいの小さな街で、農産物の集散で活気にあふれていた。

内地で結婚した妻と長女を呼び寄せ、生活は何不由なく、五族協和、王道楽土の住みよい平和な生活がつづき、昭和十七年三月長男、十八年十一月には次女が誕生し、家庭団らんの毎日であった。

太平洋戦争突入後は、日一日と、経済統制が強くなり、生活物資も不足がちで、若い働き盛りが、召集され、人びとの心には、どこか暗い不安な気持があったが「勝つまでは」と頑張っていた。

昭和二十年八月九日、ソ連軍がソ満国境を越え侵攻し、広島、長崎に原子爆弾が投下されたことをラジオ、新聞がいつせいに報道し、街中は騒然となり、満人や鮮人は威張りだし、日本人のいうことはいっさい聞かなくなった。

八月十五日、終戦、各所で小ぜりあいが発生し、家庭道具や衣類などの取上げが始まった。日本人は危険をのがれるため、二十人、三十人と集団で共同生活をするようになったが、八月二十日頃よりソ連軍が入ってきて、五、六人ずつが酔っぱらって拳銃をつきつけ、女を出せとおどかし、女子供達は毛布等をかぶり、隠

れていたが、土足であがり、一人一人男女の確認をし、その場で辱めるといふ野獣同様の暴挙をした。男達が助けようとすると拳銃で射殺する、私の目の前でも二人の男性が射殺され、どうすることもできなかった。まさに地獄絵とはこのことかと鳥肌が立つ思いであった。男性は強制的に駆り出され、工場の取りこわし、駅の貨物の積み降ろしの重労働に使役される毎日で、十二月末頃まで続いた。

妻は昭和二十年十一月、次男を出産したが、食うものもなく、寒さの中、よく子が産めたものとふしぎでならない。妻も幼な子四人の養育のため、自分の食まで減らし、やせ細った身に鞭打って子供達を守った。

このような状況が毎日毎日つづき、みんな疲労の極に達し、「今日もなんとか生きのびた」「明日はどうなることか」と、不安と悲しい自分の運命を嘆き、お互いに明日をも知れない身を慰めあっていた。

七月七日、待ちに待った引揚げの汽車に親子六人、一週間分の食糧を持って、無蓋車にすし詰めになり、振り落されないよう、家族が一緒に抱きあい、幼な子

をひもで固くゆわえて、やっとの思いで汽車が出発した。これで日本に帰れると笑顔が見えるようになったが、汽車はのろのろと南に向かつて走り、奉天駅を過ぎ、小さな駅にとまり、一晩待機することになった。

朝早く、満人数名が銃を持ち、品物検査と目ぼしい物を、全部取上げた。そのうえ、汽車の燃料(石炭)を買わねば汽車は走らせないと無茶をいつてきて、皆の金を強引に奪っていった。なんにもなくなった私達、どうにか錦州にたどりつき、集結地のコロ島より引揚船に乗り、長崎の佐世保港に上陸し、懐かしい故郷に帰り着いた。家族六人、よく帰れたものと思う。衣食住、何一つない乞食同然の生活が始まったが、満州と違い、生命に危険のないだけ、心の安らぎがあった。

世紀の終戦

群馬県 山崎 さとの

昭和十七年四月、当時満州国、北部露東県に大陸の花嫁として、生まれて初めて海を渡り、北満の国際都市ハルピンより更に北の露東で新世帯を持ち、西も東も又言葉もわからず、町に生活用品を買うのにも手振り手真似でようやく買い物をして、社宅に帰る時は馬車(マーチヨ)に乗って帰宅した。

そんな生活をしているうちに、昭和十八年四月、長男が誕生したが、氣候風土に馴れないためか、急性肋膜炎となり、ハルピン市の国立病院に入院した。乳幼児がいるので、派出婦をやとい、長期にわたる病院生活を送り、スタートより大変でした。

言葉もようやく通じ、氣候にも馴れて、暮し易くなってきたそんな矢先、主人は現地召集で突然関東軍に入隊し、子供二人をかかえ留守宅を守っているうち終